

粟郷土研究会報

№ 31

43. 8. 20
兵庫県宍粟郡
山崎町
教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話②2000番

千種地区における

タタラ(製鉄)遺跡の発掘

上山 勝

一、古代製鉄史解明の現状

鉄は文明の発達に大きな役割を果して来た。古代大和朝廷の権力の背後には鉄の獲得があつたし、中世の荘園経済をささえたのも鉄製農工具であつた。武家時代の武器・武具、そして明治維新後の殖産・興業政策による日本資本主義の発達も鉄の掌握にあつた。

このように文明発展に欠くことのできない貴重で重要な鉄でありながら、その歴史をみるに体系的に叙述される段階にはまだいたっていない。

日本ではいつごろから、またどのような方法で製鉄がおこなわれたかという単純な問いにも明確に答え得ないのが、古代製鉄史解明の現状である。日本人が鉄を使いはじめたのは一般的に弥生時代(約二千年前)とさ

目次

| | | |
|--------------------|------|----|
| 千種地区における遺跡の発見 | 上山 勝 | 1 |
| 明治初年の地理書に叙述せられた宍粟郡 | 中村 潔 | 5 |
| 本会再発足十年の回顧 | 安井寅一 | 6 |
| 宍粟の崎人 | 小林楓村 | 8 |
| 宍粟鉄の刀 | 黒田義隆 | 10 |
| 琵琶湖周辺見学旅行記 | | 10 |
| 新刊書紹介 | | 11 |
| 会員名簿・雑記 | | 12 |

れている。弥生時代の代表的な遺跡静岡の「登呂」ではすでに農耕生活をしており、多くの木製品が発見された。木製品の加工のあとを調べると鉄製工具が使われたあとが認められる。鉄製工具の原料は何であつたか。また国内産か国外産かまったく不明である。しかもこの遺跡からは鉄製品を発見することはできなかった。鉄は土中に埋められるとすぐ酸化し、形をくずし鉄の考古学的解明は一層困難になるのである。

二、「播磨風土記」にみる製鉄の記述

日本最古の史書「日本書記」によると垂仁天皇の三年

(BC二七年)新羅の王子、天日槍(あめのひぼこ)が多くの鉄器を持つて日本へ渡来し、瀬戸内から播磨へ入り出雲族と勢力争いした記述が、神話的形式でのせられている。

「古事記」にも天日槍は製鉄を伝えた帰化工人で播磨ときわめて深い関係にある人物である旨記されている。

ほぼ同時代に編集された「播磨風土記」(AD七一三年)によると、

◎揖保郡の条に

天日槍命韓国より渡り来り宇頭川底(揖保川下流)に至り宿る所を乞うた。志挙乎命(播磨に勢力を持つていた勇者)は海中を許した。天日槍は剣で海水をかきまぜ島を作り宿した。志挙はおおいにおどろき云々……。

◎宍粟郡(シサワゴオリ現宍粟郡)の条

。川音村(現山崎町川戸)天日槍がこの川に宿り川音が高いといった故に川音村といった。

。伊奈加川(現山崎町土万志文川)

志許乎が天日槍と国の争奪をした時この川でいなく馬と出あつた。故に伊奈加川といった。

。波加村(現波賀町)

国を奪いあつていた時、天日槍が先にこの地に来ていた。志許乎は「先に到ろうとはさては計つたな」といった。故に波加村といった。

その他数カ所、新羅から帰化した製鉄工人天日槍の記述は見られ、その足どりをたどると、瀬戸内から揖保川をさかのぼり郡北に到っている。

。柏野里 敷草村(現千種町)

草を敷き神座とした故に敷草といった。くちなし・粉・栗・黄蓮・葛を生じ、鉄を生じ、狼・ひぐまが住んだ。云々……。

。御方里(現一宮町三方)

大内川・小内川・金内川・大いになると大内と称え、小さは小内と称え、鉄を生ずるは金内と称えた云々……。讃容郡(現佐用郡)

鹿を放つた山を鹿庭山となづけた。山の四面に十二の谷あり、皆生鉄があつた。難波豊前朝廷にはじめて進めた云々……。

以上の記述から、六・七世紀すでに宍粟郡北から佐用郡方面にかけて製鉄がおこなわれていたと考えられる。

三、発掘に至る経緯

近世における製鉄跡は郡北各地にみられ、製鉄集団の移動による操業で規模も大きく屋内タタラでフィゴを使用した跡が見られる。

昭和四十二年十月千種町西河内字高保木の谷間を町営苗畑造成作業中、地下二〇〜三〇センチより製鉄跡らしき

地点に炉床と鉾滓（かなくそ）を数か所から発見、ただちに考古学協会製鉄部会の専門家岡大の和島誠一教授に連絡調査をはじめた。

1. きわめて小規模タタラで数十メートル間隔に点在していること。

2. 鉾滓の散布がひじょうに少ないこと。

3. 野ダタラ（露天）で晴天をみはからつての原始的操業らしきこと。

4. きわめて強風のある谷間で自然風を利用して火力を高めたと考えられること。

5. 谷間で風も強く日蔭の地でありながら、農耕文明の弥生式中期の土器片が数十片発見されたこと。

6. 谷間の平坦面からさらに中腹の傾斜面にも炉跡を発見（傾斜炉は古代タタラと考えられている）。

7. 古記録・古文献に製鉄記述があること。
右の諸点から、本格的な学術調査を実施することになった。

一般遺跡の発掘をしていて製鉄址が掘り出されたり、鉾滓が出土したことはあるが、製鉄址だけの学術調査は日本では初めてのことであった。

四、発掘記録

岡大和島教授の指揮のもとに、東京医大甲島寿夫・東大湊秀雄、東京工大大場立夫・広丸山益輝各教授・資源科

学研中村嘉男・長谷川熊彦氏、その他考古学協会会員等計二十三名の調査員と、地元山高千種分校の地歴班、千種中郷土研究部員等多数の手により、昭和四十三年三月二十日から四月五日まで、十七日間、延べ五百余人の力で、千種北小に調査本部を置き、地元千種町の協力を得て発掘はすめられた。

B 地点平坦面タタラ 高保木一五八三番地
対岸のスキー場扇状地

A 地点傾斜面タタラ 高保木一五八二の二番地
北小学校裏山

右の二地点の対比調査を開始した。

発掘をはじめめる前に地下へ電流をとおり、電気抵抗の有無を調べ、地下構造を推測する。さらにボーリング棒にてタタラ跡を確かめトレンチ（試掘）にかかると。

A 地点北小裏山は電気探査で鉾滓のたまってある地区A区を確かめ、その上方に長さ約二メートル・幅約一メートル

乗り心地よしの新車
デラックスで親切安全

TEL ②2166代・②0166

山交タクシ



新刊書 雑誌 文房具

読書の秋!!

本、安井へ
ぜひどうぞ!

安井書店

本町通
TEL ②0700 代

ルのタタラが斜面を横切るような方向に存在することがわかつた。

さらにこのA区の北約十メートルの斜面にもタタラと焼土と木炭の層がボーリングで検出された(B区)。このB区でも長さ約二メートル幅一メートルの長方形のタタラ(B1)とその北隣に半分以上壊された構築物(B2)のあることがわかつた。

これらA区とB区の構築物の状態を対比してみると、いずれも斜面の下にある部分には壊れた炉壁や炉床を一定の幅に敷き並べ、斜面の上手では焼けた粘土が連なつて長方形の額ぶち状をなし、その中には木炭を多量に含んだ土がつまつている点が共通していた。

異なるのはこの中の木炭を取り除くと、A区の場合には粘土の炉床が現われ、炉床の下がさらに掘り込まれて、木炭がびつしたりたたき込まれている。これに対しB区ではいずれも額ぶち状のなかは木炭の層が認められるという点で

ある。

A区ではまた北側の短辺の東寄りの外側に鉾澤を流し出す細い溝がさられていることもわかつたが、B区ではそれらしいあとが認められなかつた。しかし両方とも周辺に散つている鉾澤をみると、かなりよく鉄がふきわけられていることが想定される。東大の湊教授もフェアライト (Fayalite) ケイ素がガラス質に熱変化したもの) のかなり大きな結晶が認められるので相当高い温度が考えられるとの説であつた。

しかもこの斜面のタタラではふいごの羽口がついに発見されなかつた。風あたりの強い所なのでふいごを使わずに操業したと考えられる。

B地点、平坦面タタラ、学校の対岸のスキー場になつている扇状地が平坦面に移る地帯も苗畑造成予定地であつたが、ブルドーザーの削つた東縁に鉾澤を盛りあげた地ぶくれを認め、それを破壊寸前に発掘した。そこではタタラの壁などが散乱していたが遺構として認められる状態ではなかつた。そこでその上手をボーリングして掘り上げたところ、電柱で一部を破壊されていたが、長径二メートル、短径一メートルの範囲に木炭をまじえた土がつまり、周囲に炉壁を額ぶち状にめぐらしたタタラを発見した。このタタラを中心として四囲に農家の土間のような踏み固められた土床が次第下りに続き、その範囲は東西四メートル南北三、

五メートルの長方形となる。おそらくその程度の建物がタタラ場を覆つて建てられていたと思われる。さらにここではタタラの下方だけでなく、四囲の壁の基部にあたる熔壁の類ぶちの下方にも穴を掘つて焼き固め、焼土を結めて防湿に万全を期するなど山上のA地点にみられない周到ぶりであつた。

またここではふいごの羽口にあたる孔の認められる炉壁が発見された。ふいごで送風し火力を高めるタタラであると想定される。

なお出土した炉壁・鉾滓は各大学へ持ち帰り現在分析研究中で綿密な調査結果は後日に待たれている。

はたして古代製鉄址であるか、中世以後の地元農民の手による製鉄炉であつたか、追つて判明されると思われる。

既述の通りタタラの学術調査は日本ではじめてのことであつただけに、発掘の事例がなく、判明もきわめて困難な作業である。

最後に今回の発掘に関しとくに地元として伊和高校宇野正蔵先生、佐用高校村上絃揚先生、千種中学校城内義夫先生にお世話になつたことを記しお礼申しあげます。

(菅野中学校教諭)

明治初年の「地理書」に

敘述された「穴栗郡」

安志 中 村 潔

私達の現在の営みなり生活は申す迄もなく遠い遠い昔から連綿と続いて参つたものでありまして、而も人類の叡智は、たゆみない進歩発展を遂げて現代のような高度文化に浴し得る結構な時世となつたのであります。尚今後の人間社会の変動進展はどんなでありましょうか。或人は今日迄の千年・二千年の変化より更に大きな人類社会の変貌が、ここ拾年も待たずに展開されるものと見ています。

こうした目まぐるしい「時進日歩」の現代に処する私達としまして、我が郷土穴栗郡の百年前の姿をふり返つて見ますことも意義あることと存じます。「温故知新」し古きを温めて新しきを知る。これも大切だと思ひます。

幸い明治初年の地理書に当時の穴栗郡の全貌がうかがわれますので左に記載いたします。些かにも御参考となりますれば望外の俸せに存じます。村名が昔風のままであつたり、山や河川の名前に誤謬があつたりいたしますが、原文のまま記写いたします。

記

- 一、書名 兵庫県管内地誌略卷之下
- 二、発行 明治十年九月二十五日版權免許
- 三、著者 三重県平民 藤井忠弘
全 長崎県平民 長野一校
- 四、出版人 兵庫県平民 竹中真次

五、発売所 大阪府東区北久太郎町

浜本伊三郎 印

○穴 粟 郡

筆者註 国(播磨国)ノ西北隅ニシテ、北ハ大山脈ヲ隔テテ、但馬

ノ七味、養父、朝来ト疆(サカイ)ヲ接シ、西ハ因幡、美作ニ錯リ(マジワリ)、南ハ揖東、揖西、佐用ニ至ル、国

中第一ノ大郡ニシテ亦タ第一ノ山郷ナリ、名色一、村落一百七十五、戸数一万零三十余、人口四万二千八百六十余アリ。

宍粟川、又タ大川ト称ス、因、但、播三国ノ界ナル豹山(筆者註)現在ノ「氷山」と思ひます)ノ麓ニ源シ、引原溪ヲ過ギ、南流シテ郡ノ正中ノ貫キ、三方川、染河内川東ヨリ会シ、西谷川、昔野川西ヨリ注ギ、以テ揖東ノ境ニ達ス、揖保川の上流ナリ。千草川ハ西北境千草谷ヨリ発シ、郡ノ西部ヲ下リ、船越山ノ東足ヲ流シテ佐用ニ入ル、舟越山ハ、舟越村ノ西ニ在リテ一方ノ高岳ナリ。黒尾山ハ大川ノ西岸安積村ノ上ニ在リテ、郡ノ中央ニ崒然タリ、西陰、

清酒

山陽盃

サヨウハイ

山陽盃酒造 有限会社

TEL ②〇〇六三

上野村ノ奥ニ懸水アリ、瓦山ノ滝ト号ス、高サ四丈余、下流伊沢川ニ会シ、西谷川トナル。

大川ノ東奥染河内川ノ南ニ須古名村(今の須行名)伊和神社ヲ祀ル、之ヲ本国ノ一之宮トス、県社ノ一ナリ(始めは県社

だつたのでしようか)其ノ東南数丁ヲ隔テテ、母栖村ニ大飛泉アリ、高サ十三丈?流シテ大川ニ入ル、野原ノ滝此レナリ

山崎ハ、姫路ヲ距ル八里三丁余ニシテ、大川ノ西方ニ当リ昔野川ノ北ニ位ス、戸数五百三十余アリ、溪谷口ノ都会ニシテ、郡役所ノ在ル所ナリ。

鉾山四所アリ、共ニ鉄ヲ産ス、西谷川ノ水源小茅野村ノ三室天児家ノニ屈ヲ以テ最モ採出衆(オオシ)シトス。以上

右で見ますと、当時交通不便の辺陲にあつた為か宍粟名産の材木、木炭の産業すら書いてありません。まことに「兵庫

県の北海道」と称されたのも無理からぬことと思ひます。今日、二十九号線の開通、更に近く中国高速道路の着工等を思ひ、更に現在の宍粟郡の躍進しつつある姿を觀ましてうたた今昔の感に堪えない次第であります。

一了ト

本会再発足

十年の回顧

安井寅二

文化団体などは長年月の間には必ず曲折があつて盛衰のある事は止むなき事である。茲に本会再発足の回顧を書く

くに当り一応本会の成立より、再発足に至る迄の概況を述べておく事が順序であると思ひます。

初めて本会の誕生したのは昭和八年一月十二日であり、其の発会式の当時会員は百十二人であつた。此日結成式を挙げて左の通り役員を選定した。会長前野修二（町長）副会長安原源十郎（助役）幹事は春名荒太郎、長沢米蔵、南部耿介、村上彰治、尾崎孝三郎、安田喜一郎、安井寅一、志水富次、前野愛吉の諸氏であり昭和十六年頃まで続いて其の間には相当の活動をした。和田千吉博士、国府犀東先生、平泉澄博士の外名士を招聘して講演会を開催し、昭和十二年六月までに『しゝさは』会誌一号より七号までを発行した。其の後十四年一月に本会が主唱して山崎開齊先生旧蹟保存会を設立して会長前野修二、副会長安井金三郎、同尾崎孝三郎、幹事に大前沢一、南部耿介、安井寅一、志水富次、前野愛吉の諸氏を選任して地元は勿論京阪神まで運動の結果、十六年十一月までに開齊屋敷と称せられる土地を買収、神社創立門長屋建設更に記念碑の建立に成功したのであつた。其の後の社会情勢は一変し日支事変、次で大東亜戦に突入したので文化事業はすべて中絶するの止むなきに至りました。

戦後二十二年六月に山崎高女校の教諭であつた島田清先生が本会の再興に努力して下さつて二十四年八月までの間に「志佐波」会誌を七冊まで謄写版及印刷にて編輯発行さ

れたが、同先生の県庁へ榮転されたと役員の数人が他郡へ転居し、或は故人となつた為約十年近く休会の状態が続いたのである。これまでが再発足前の経過である。

昭和三十三年一月頃前町長の前野猛夫氏の本会再興発議により、同調した十数人が協議を重ねて再発足すべく決定、会則を制定、改めて会員募集をした所約三百名の加入者を得たので、同年三月二十一日に山崎町公民館にて再発足の第一回総会を開催した。その時会長に村上彰治、副会長に前野猛夫、岸野市五郎、幹事に春名荒太郎、安井寅一、横井怒一、志水富次、和田秀男、三木金之助、入江静夫、福井詫治、宇野正彦、福井政男、栗山宗知、下村慶之助、田内松右エ門の諸氏を選定した。総会後に当時県社界文化主事の島田清氏の「穴栗郡の文化財と史蹟」と言う講演があつた。この日より早くも十年を経過、此間に本会として実行しました事項を収録して見ました。

『会報の発行』三十三年六月一日に第一号を発行しまして本年四月一日に三十号を出しました。貧弱な会誌ではあります但し其中にて本多藩特輯号、開齊先生特別号、美玉三平志士の記念号など年三回の予定発行は幸に継続いたしました。

『開齊神社関係』三十六年秋頃より新潮会長の前野四郎氏の幹旋と村上町長の熱意とにより、文豪吉川英治氏が東京市内にて発見された由緒ある開齊木像を当社に寄贈される事になり奉獻の辞まで添えて下さつたので本会に於ても



仕出—お弁当

きくや

えびす神社南角・電(2)二九九

極力協力、三十七年四月一日に開斎先生二百八十年祭を厳修すると同時に、吉川先生の奉獻の碑と併せて歌人川田順先生の歌碑の除幕式を挙行しました。猶同日午後下村記念館にて評論家嘉治隆一、前伊太利大使日高信六郎及東大教授阿部吉雄の各先生の大講演会がありました。かくて開斎神社は山崎の一名所として存在する事になり、猶神社に於ては毎年其秋の祭典は必ず執行して来ました。

『開斎会報のこと』三十九年秋季より地元西鹿沢を主とし本会が協力しまして旧本多館を開斎屋敷内に移転改築し、西鹿沢公民館と開斎会館とに共同使用することになりました。

『見学旅行』三十四年五月より毎年春秋の二季に見学旅行を計画、日帰りの旅ですが、郡内は元より遠く東は京都より西は広島県まで、其間にある名所旧蹟を研究見学した事二十二回に及び、会員の方々のご満足を得て楽しみに待つて頂いている次第です。

『郷土館の開設』四十二年四月四日に山崎町立郷土館の開

館式が挙行されました。館内の陳列設備倉庫建設など本会も全力を尽して協力し、元本多藩所蔵品、八幡神社宝物、町家保存の縁故品などを陳列、県下第一号の町立郷土館が誕生致しました。

十年間にも人の生死は全く予知出来ませんもので再発足の指導者であった前野猛夫氏は発会式後間もなく急逝せられ、開斎神社に専属奉仕して居られた春名荒太郎氏は昭和三十八年二月に逝去、再発足以来会計に見学旅行に其他積極的に御協力下さった横井怒一氏を四十一年九月に失うた事は本会の大損失で、この方々には深く感謝すると共に哀悼の情に堪えぬものがあります。

以上十年間の回顧を書きましたが、会誌記載と重複の事項もありませんが事実を明確にするため再記した事をお許し願います。

実粟の畸人

矢野 小林 楓村

(石原伴左エ門)

実粟郡千種里岩野辺村百姓なり。男は伴蔵代々二字帯刀、東照宮神君より御免下され、奇特人の聞え有し人なり。風儀は古代のさまを用い、善道を好み下賤のものへ時によれば五穀を施し、荒年の時は厚く手当致して諸人を助けしむ。依て奇特人の名あり。当宅礼儀正しくして、下女下男に至るまで至極行儀よろし。耕作には、朝夕肥の致し方、鋤つ

かい、鋤つかい、牛馬に心をつけ、山林に気をつけて、或は谷にても荒地なき様に心をかけ、物に念入此家有るに付て、此辺の人行儀を覚え知るべし。扱いろりも上下の二つ有て、奴僕の男子は、奴僕の男子たち、下女は下女たち、上なる人は上に居るなり。座を夫々に定め、食も又家法あり。至極礼式を以て事を正し、山中にても妙に古風有り。此辺に鉄山有り。是は大坂住友氏金主にて永代当家より家業とせり。三百余人の者皆鉄山支配にて宗旨なし。名前帳面にては皆一判なるべし。神代の儘にて是は是唯一神道という時の風儀なるべし。常に此辺は、平日下賤の女帯をせず、麻布のまえたれの紐を兼て帯とせり。家の屋根は茅ふき又は木羽にてふき、石を以て木羽の上に並え置くべし。是を富貴人の屋根とし、此辺下男にても、春の彼岸より秋の彼岸まで夜五つまでは縄をない、俵を編み草履又は牛馬のくつをうつ。冬春も山家にては男女ともに仕業を致すべし。春夏は朝とく起て草を刈り、肥とす古風今に学べり。是らの仕業を勤る事の其法古代より今に至るまで石原氏はくづす事なし。依て家名相続目出度数代致しに今五節句休

物
カ-テン
室内装飾

香
西
疊
店

香
西
孝

播磨山崎・警察署前
TEL(2)1二四〇七

日の礼神祭具明なる事おもしろき事なし。

(西村儉助)

宍粟郡山崎本侯家臣西村儉助号は玉山と云う。武道にはげし、ことに剣術・弓道・馬術はすぐれてよろしとぞ。儒学諸文章を今風にして風流なり。又画をかき諸事に心がけよろしきが故に、秀たる事尤多し。礼儀正しく温順にしてかりそめにも人をあしくいわず、下賤の者えも言葉やわらかに遣いよくいいなし、雖然若き時大江戸に御供奉りし時友人に誘われ、義理にひかれ酒より無余儀事にて散財し、ふかまとなりて吉原という処にて身をけがされ侍りて、終に其けがれ願れ出来て浪人となりぬ。深入はよろしからぬことを思ひしるべし。依て佐用郡平福村へ来たり、五六年ばかりひそみ侍れども、更に心中悪きにあらざれば、いよいよ本心に立かへり侍りて小児若者に諸芸の師範し居たりけり。元来人物よくして寛仁明哲の士なれば、文官の如くして帰藩しめでたく忠をつくし、義を重くし、妻も又勝れたる貞女にて和順なる産れなれば、貴賤ともに礼儀を正し温順和平なるが故に帰藩の時だに門人にまれ、友人はまねなこりを惜まぬものなかりきとなり。神吉源右エ門大にうへられしをくやくやくおもふも又親友の親しみ深きが故なり。こはむかしの火のすせりの尊のことも思ひいださるべし。註一以上は、英賀保の宇都宮大潔という学者の著「播磨崎人伝」にありしを見て書きました。文章は、江戸時代のもので読みにくい全文そのままです。

誠意をモットーに
奉仕する店



肉の山下

本町通
TEL ② 0664

宇都宮大深は、明治二年卒、著書多く、中にも「播磨後風土記」十冊は郷土史研究には参考になる。西播史談会は、二・三冊にまとめて復刊したいと準備中。「播磨崎人伝」五冊は、吹田市の千種某所蔵。宍粟郡から前記二人が掲載されている。

宍粟鉄の刀

黒田義隆

近年宍粟郡に々々跡が発見され宍粟製鉄の歴史を探る人々が多くなつて来たことはご同慶に堪えません。

江戸中期に、その宍粟の鉄をもつて作つた刀がある。すなわち正徳二年（一七一二）五月に高柳加賀守貞広（七十才）とその子国継の二人が宍粟の鉄をもつて鍛えた刀で、願主平瀬某が播磨一の宮伊和神社に奉納したものである。焼損の姿のままであるのは、嘉永五年（一八五二）二月一

日伊和神社が炎上したとき、伝新田義貞奉納甲冑などとともに神殿内に納めてあつたためであろう。長さ一尺九寸。

（銘）正徳式壬辰年五月吉日、高柳加賀守藤原貞広行年七十有二、同子国継相共ニ以宍粟鉄作之。願主平瀬氏。

琵琶湖周遊見学旅行記

五月十二日三台の観光バスに満員の会員を乗せて六時半に山崎を出発、神戸市内と西宮より京都までは高速道路を利用、早くも京都平安神宮に十時半到着、参拝後有名な大庭園を拝観した。曇つた空が小雨となつて来る中を比叡山麓を越えて大津へ出る。それから琵琶湖の西岸を走り近江神宮へ、更に進んで日吉大社に参拝した。堅田辺より近年架橋した大橋を渡り、湖を横断して海上を越した感じ、東街道へ出て、瀬田の唐橋を通り石山寺へ参拝した。由緒ある源氏の門、或は三重塔などを見て寺を辞し、大津より又高速道路にと戻つたのは午後八時半であつた。

盆踊唄

雨が降りそうだ よだちがきそうだ
宍粟の山崎流れそうだ





新刊書紹介

近世千草鉄山史料(中)

宇野正磯氏(伊和高校教諭 山崎町岸田)は、上巻につづいて「近世千草鉄山史料」中を刊行された。B六版、二一〇頁。内容は、千種屋手控帳(解説付)、成田屋の鉄針金請払之帳、天児家山鉄荷請払帳、三室山鉄荷物請払帳の四つで、千種屋分は、山崎町平瀬軍二氏所蔵にかかり、享保末年から宝暦初年までの約二十ヶ年の資料である。成田屋は、網干のが藤高文氏方蔵の文書で、本書には天保十五年、安政四年、同五年の三ヶ年分が収録され、あと下巻に続く由。これらの文書を採録されてから十年あまりも笈底に眠っていたものをようやく刊行されたので、鉄山史料の乏しき現在、研究者に多大の使益を与うるものと期待される。下巻の一日も早き出版を待つものである。

老松酒造二百年史

A五版、布装箱入、百七十四頁の「老松酒造二百年史」が、老松酒造有限会社から出版された。同社は知る人ぞ知る「老松」醸造の北門前屋が、戦後法人に組織変更された商号である。この北門の酒造創業二百年を記念して発行さ

れたもの。二百年史は、創業・発展・道素活躍・健全経営と統制・会社組織の五つの時代に類別して記述、一六九四年(元禄七年)からの年表も添えられて至れり尽せりである。付録として収載された三編は、中々興味あるものばかりで、第一の「先祖代々記録」は未発展のもので、三代目前野善太夫が天保三年作成されたもの。郷土史家にとつて見逃せないものである。第二の「穴栗郡酒造沿革雜記」は大正六年に創業百五十年記念に、前野道素翁の著わされた本の復刻で現在貴重本になつている郷土資料が再版されたとは喜びに堪えない。第三の「道素翁といろは訓へ歌」は、年配の者にはなつかしい木版ずりのいろは歌を小学校時代にもらつた記憶がある筈、その絵のついた二十二枚が記載してある。「い」から「ら」までで年代は明治三十一年から大正八年までになつている。勿論これは、十年前に友施会から発行された同名の冊子を再録されたものである。



断然安い!

家具なら西播一

400坪の店舗
300坪の倉庫

ハマ綜合家具センター

寿 柳

山崎町本町
TEL 2-0121

会員名簿 (25)

| | | |
|-----|-------|----------|
| 本町 | 木山 竜七 | 金谷 片山 純一 |
| 東鹿沢 | 山本 久治 | 神野 森裏 幸治 |
| 出水町 | 笠原庄太郎 | 島津しげ子 |
| 門前 | 竹内つぎ子 | 三岡ますゑ |
| 元山崎 | 広瀬かづ子 | 田中いとゑ |
| 寺町 | 村上はるゑ | 尾崎 くま |
| 上寺 | 村はつるゑ | 東 しげ |
| 山田 | 阿曾 稔 | 谷口よしの |
| 段 | 小川 久雄 | 山本はるゑ |
| 出水町 | 森元 才助 | 東角ゆき子 |
| 中井 | 横山こしの | 田中ひさの |
| 〃 | 中住サカエ | 田中こすぎ |

入会の方は会費百円(壹年分)添えて申込んで下さい

報

★播磨さつき展は、六月二日・三日の両日、山崎町さつき展示場と下村記念館で開催。今年は観光バスで観賞者が大量に來場、空前の盛況であつた。同時に記念館別室で丹野金露氏門下の漆工芸品の展覧会を開催好評であつた。

★山崎町の町花は、公募の結果「さつき」に決定された。

★老松酒造二百年創業記念に別掲の二百年史を刊行の外、いろは歌の内「ちりをしらべよ世界の地理を島嶼根性をやめにして」の一首を銅板とし、地球儀と共に山崎小学校の庭に建設、その他郡内各戸(約一三〇〇〇世帯)に対し清酒と手拭を配布された。

★宍粟郡波賀町では、この春宝篋印塔十一基が発見された。齊木・原・飯見・鹿伏の各地区で、齊木地区には七基ある古いのは足利初期のものらしく、新しいと思われる齊木安農寺境内の塔は、高さ四米もある大きいもので明和四年の銘があるという。

★郷土会有志は、六月六日マイクローバスで竜野市郷土館、聚遠亭、鹿島会館およびその近傍の文学碑を歴訪、東丸醬油工場を見学して後、網干津の宮、竜門寺等に参拝、太子町班鳩寺を訪ねて帰崎したが、この行について竜野市の山本健治、内海七郎両氏に大変御世話になりました。

★本会秋季見学旅行は、九月二十九日の予定です。詳細は後日通知申します。

あらゆる
車輻木互
塗料
その他

日本ペイント特約店

あがた薬局
塗料部

山崎電報電話局前
TEL ②0816

秋季見学旅行御案内

お待ちしております。なるべく早目に申込みして下さい。

日 時 九月二十九日(日) 午前六時半 神姫観光バスにて出発

午後八時頃帰着

見 学 地 順 序

一、洛西京都を目指して淀川の西を進みます。

一、水無瀬神宮 元官幣大社庭園にある茶室燈心亭は、後水尾天皇のご寄

附と伝える。

一、松尾神社 酒造の守護神大殿は四百余年前の建築にて国宝、元の官

幣大社。

一、嵐 山 四季いつでも風光明媚の日本の名所として有名、渡月橋、

千鳥ヶ淵など知らぬ人はない(休憩屋敷の予定)。

一、天竜寺 京都五山の一夢窓国師が開山として創建した。曹源池と

称せられる名園は名高い、選仏堂の天井の竜も有名である。

一、清涼寺 釈迦堂と称す。嵯峨天皇離宮の旧蹟、本尊は赤セングン

の木等身大の国宝である。

一、妙心寺 六百年前花園天皇の勅願により創建せられ、禅宗の大本

山で書院庭園拝観の場所多し。

一、二条離宮 八万三千坪の広大の土地で元將軍の駐紮所、善美を尽せ

る殿堂と書院、更に幽邃の庭園は見る人を驚かします。

京都よりは高速道路により帰路に着きます。

一、会 費 金壹千四百円 申込みと同時に前納願います。

注意 風弁当はご用意下さい。

一、申込み所 町役場教育委員会内田中 西鹿沢 三木金之助

門前 安井寅一 本町 志水成文堂

出水町 岸本正一 栗鹿沢 志水新次郎

西鹿沢 田中 稔 大歳町 入江静夫

山田 福井 詔次 三津 田中 興太郎

六 栗 郷 土 研 究 会